

# 現代詩の授業(1)

— 中学三年生の場合 —

## 報告の内容

はじめに

- 一 中学校詩教材の問題点
- 二 なぜ現代詩を扱うのか
- 三 詩の授業・一つの試み
- 四 現代詩はどう受容されたか
- 五 現代詩教育の可能性  
おわりに

はじめに

この報告は、中学校三年生を対象として、現代（戦後）詩を扱った実践の記録である。

足立悦男

四月当初、年間の指導計画をたてるための参考にといい、現在使用している二冊の教科書（三省堂、学校図書）所収の詩教材について、簡単な調査を行なったところ、その反応はかなり悲観的なものであった。詩教材への不満を述べる生徒もかなりいたが、大勢を占めたのは、それ以上に詩の授業への不満であった。「詩は一人の時、静かに読むのがいい。それを授業で扱うと、いくら好きな詩でも、なんか興味をなくしてしまう。」（R君）というような意見である。この反応には、切実さがもっていた。わたしたちの反省すべき点を指摘されているようであった。

しかし、わたしは、この生徒たちの詩に対する考え方にも問題があるように思った。かれらはたぶん「好きか嫌いか」という好みの次元で詩を考えようとする傾向にある。この点にこだわりをもったのである。

文学ジャンルの中でも、とりわけ詩ジャンルは、その受容に際し、知性的要素は弱く、感性的要素がきわめて強く作用するとされ

ている。この点はたしかに否定できないにしても、詩が個人の好みの次元でかたづけられてしまうと、四〇名の生徒を対象にすえた詩の授業は成立しえない。この危惧は、わたしにとって、初めての詩の授業であるこの試みを思い立つ出発点となった。

そこで、詩の知的分析―この一見矛盾する作業をとおして、詩の授業のありようを考えてみることにした。今回の試みは、現代詩をとくに選び、生徒たちがそれをどのように受けとめるだろうか、という点に軸を置きつつ、好みの次元でその受容の姿勢に差を生じてしまいがちな生徒の事態を突きやぶる詩の授業のあり方をさぐってみたいという思いもあった。現代詩をとくに選んだのは、未知なるものへの関心をひき出すためであった。

### 一 中学校詩教材の問題点

『文学と教育の広場』（「みんなで国語の教科書を読む会」編、横浜）は、現行国語教科書の分析研究において注目されてよい機関誌である。その八七号V（七二年秋）に「詩教育の問題」が特集されている。その中で、福井すみ代氏は、「中学のどの教科書をもっても一年間のうち詩は三、四篇ぐらしかあげられていない。年間国語の時間が一七五時間ある中でそれは五時間足らずの時間を費すにすぎない分量である。」（注一）と述べている。ちなみに、わたしの使用している二冊の教科書の詩教材は、つぎのとおりである。

△三省堂版「中学校現代の国語3」V

峠

葦の地方

真壁 仁

小野十三郎

わたしはルイジアナで

一本のかしの木の育つのを見た

ホイットマン

△学図版「中学校国語3」V

雲

谷川俊太郎

大門峠の見える村

田中 冬二

鹿

村野 四郎

からまつ

北原 白秋

ぼくは樹木のように

木下 夕爾

このうち、三省堂版では、「峠」「葦の地方」は人生きる姿勢V、ホイットマンの詩はA創造を求めてVという主題単元の部分を構成している。また学図版では、「大門峠の見える村」「鹿」がジャンル単元A詩・随筆Vの部分を構成し、他の三篇は単元の合い間に挿入されているいわば装飾的な教材である。

いずれにしても、傾向の全くちがう数篇の詩が採られている印象がたつよく、A詩Vとしての独立の扱いによわいと言うことができ。詩教材の位置づけの弱さは、福井氏の指摘する「配当時間」の問題だけでなく、「配当教材」、その単元での「位置づけ」の問題としても指摘できるように思う。

この点に加えて、福井氏はさらに、「詩を教材として選ぶ時、単なる技法とか、ことばの美しさとか、情緒的だとかいうことを中心に選ぶのではなく、生活意識に触れたものであり、何回もよみ味わうことによって生徒のイメージを広げ、感動を深め、更には緊密なことばの関係とか非代替的なことばの美しさを理解させていくようなものを選ばれたら、詩教材も生きてくるのではないだろうか。」（注2）と述べている。この「選ばれたら……だろうか」という提言は、そ

のまま現行教科書教材に対する内容的批判に転化できるだろう。

また、中学校詩教育では定評のある安藤操氏は、もっと直載に問題の所在を指摘し、「詩教材の選定でとくに目につくのは、すでに評価の定着した老詩人や物故詩人の詩が多すぎるということである。また詩そのものも、現在の変動の激しい状況に敏感に反応し、揺れ動きながらも、けなげに主体性を守りとおそうとしているかにもられる生徒の問題意識とは、かなりのギャップのあるものが多い。」(注3)と述べている。

この指摘は、主として教科書教材の内容的批判として有効である。とりわけ「生徒の問題意識とはかなりのギャップのある」点については、生徒自身の感想にも多くみられた。この安藤氏の詩教材批判は、「現代詩」教材化の試みを、側面から勇気づけてくれるものであった。

いずれにしても、わたしたち教師の側の詩観の変革が一方で問われているのではないだろうか。

注1 『文学と教育の広場』七号、みんなで国語の教科書を読む

会編、一七ページ

注2 同上誌二一ページ

注3 『国語教科書の詩 中学篇』、日本文学教育連盟編、有信

堂、二七ページ

## 二 なせ現代詩を扱うのか

今回、現代(戦後)詩をとりあげたのは、教材の新鮮さをねらったことと、生徒の問題意識とのギャップを、現代詩であればうずめるこ

とができるかもしれないと考えたからであった。

わたしの接している生徒たちは、近代詩の抒情をストレートには受けつけようとしない傾向にある。かれらをとりまく文化状況がそうさせるのであるが、屈折した自意識をいろいろな場面でみせつけられる。そのような生徒たちに、現代詩、とくに戦後詩はかれらの意識にあんがいスムーズに入り込んでいくのかもしれないと考えてみたのである。

「教科書の詩はわかりやすい。だから一度読めばそれでわかる」(O君)という感想を多くの生徒はもっている。それでは「わかりやすい詩」に代えて「わかりにくい詩」を提示された時、かれらはどうのように受けとめるだろうか、と興味もあった。

右のような視点から教材化したのであった。同時代の詩という点に賭けてみたようなもので、わたしにとっても、未知の領野へ踏み出していくような興味があった。

## 三 詩の授業・一つの試み

1

単元 現代詩・そのイメージの世界

対象 3年B組(中学、男子22名、女子18名)

授業の経過

第一時(昭和48・6・8)

「戦争ごっこ」(加藤八千代)を扱う。

第二時(昭和48・6・11)

「かくれんぼ」(嶋岡長)「地下鉄」(阪本越郎)を扱う。

課題(入鏡Vという題の九行の詩を書き、次時提出)を与え

る。

第三時（昭和48・6・13）

「鏡」（高野喜久雄）を生徒作品と比較しながら扱う。

第四時・第五時

各自、つぎの課題についてレポートする。

○高野喜久雄「鏡」について

——私の詩との比較をとおして——

2

以下、△第三時▽までの授業経過をくわしく追っていくことにする。

△第一時▽△第二時▽

この二時間は、つぎの三つの詩を扱う。

戦争ごっこ

草の上に

彼は倒れた

死んだふりをしながら

生きかえるのも忘れて

彼のために泣く

女の子もなしに——

加藤八千代

かくれんぼ

嶋岡 晟

木の中へ 女の子が入ってしまった

水たまりの中へ 雲が入ってしまうように

出てきても それはもうべつ女の子だ

もとの女の子はその木の中で

いつまでも鬼をまっている

地下鉄

阪本 越郎

私は毎日 棺に入る

見知らぬ人といっしょに

私はあわただしく釘をうつ

自分の棺に

そうして 都会の方へ

生き埋めにされに行く

この三作品を提示し、生徒の自由な解釈にゆだねてみた。それまで接してきた近代詩とくらべ異質の世界であることを、生徒たちは敏感にかぎつけた。初めは詩との間に距離を感じ、とおまきに制し合っているような感じであったが、二、三の生徒から意見が述べられると、それに刺激されて、多くの意見が出るようになった。重なるしきは最初の一〇分ほどで、そのうちリラククスしたふんい気となっていた。予想どおり、一つの詩に対しての意見は多様に分かれ、各人各様の解釈となった。一つの詩をめぐって、全く異質の感想をも

てることに、生徒たちはびっくりしたようであった。しかも、その解釈のどれをとっても、その立場に立てばうなづけるという点で、これらの詩のイメージの世界のひろさに不気味さを感じると述べる生徒もいた。

「戦争ごっこ」では、△彼△が、六歳から二五歳ぐらまでの幅でとらえられ、その年齢の段階にしたがって、解釈は分かれた。「かくれんぼ」は、冒頭の一行△木の中へ△女の子が入ってしまった△につまづいて、なかなか詩の世界にふみ込めなかった。△もとの女の子△△べつ△の女の子△とはそれぞれどんな少女なのか、意見が交わされたわりには核心的な解釈は出ないでおわった。「地上鉄」は、題名を伏せて提示したにもかかわらず、△棺△△都会△△生き埋め△などのことばから、通勤サラリーマンの悲哀ではないか、とイメージは方向づけられ、題名も「電車」「通勤列車」「ラッシュアワー」などが大勢を占めた。広島を生徒たちにとって「地下鉄」のイメージは、生活体験から考えて出にくかったのは当然であろう。このように、生徒の自由な発想に詩の解釈をゆだねたのである。わたしの方からの説明はいっさいさしはさまなかった。ただ、その解釈の基底にある発想が、どのことばからくるものであるかについては、終始、明確な説明を要求した。

つまり、この二時間を生徒の初めてふれる「現代詩」への導入として位置づけ、そのイメージの世界の多様性の確認にとどめたのである。

なお、「戦争ごっこ」「かくれんぼ」の二作品は、一九七二年度△第七回文芸研全園集會△（高知）における指定教材であり、わたしは、広島文芸研の会合において、その詩の解釈について報告した

こともあって、教材化したものである。

### △第三時△

この時間は、「鏡」（高野喜久雄）を扱った。二時間の「現代詩」への導入を経て、この△第三時△は、作品の中へ深く入り込むことを企図していた。この時間に扱う「鏡」は、それまでの三作品とくらべて、かなり抽象度の高い作品であることに對する配慮から、予め前時のおわりに課題を出しておいた。各自が「鏡」という題の九行の詩を書いてくるように指示しており、授業の初めにそれを提出させた。生徒作品の「鏡」と高野喜久雄の「鏡」との比較を試みるのがねらいであった。そのために、同じ九行で書くという指示をしておいたのである。

まず、前時扱った嶋岡豊の別の作品「胎動」を朗読する。これから生まれてこようとする胎児が、父親である「わたし」に電話をかけてきて、自分の未来は大丈夫ですかと問うという内容のすぐれた長編詩である。

ついで、提出された「鏡」という題の生徒作品を一つずつ読みあげていった。ときおり指名して、感想をきいてみた。そして、それらの生徒作品に共通している発想を考えさせると、かなり類型的な発想に拠っていることが確認できるようになった。生徒作品の中の「鏡」は、「自分自身の分身」といったとらえ方で共通しているように思われた。（この生徒作品の数編のちに紹介する）

つづいて、高野喜久雄の「鏡」を、一行ずつおもむろに板書していく。

鏡

高野喜久雄

何という かなしいものを

人は 創ったことだろう

その前に立つものは

悉く 己れの前に立ち

その前で問うものは

そのまま 問われるものとなる

しかも なお

その奥処へと進み入るため

人は更に 逆にしりぞかねばならぬとは

板書しおわると、少し時間を置いて、この詩についての感想をもとめた。しかし、前時までとちがって説明しにくいのか、難渋な表情を示し、なかなかことばにならないようであった。「難解ノ」「抽象的で、何を言いたいのかよくわからない。」という意見が多かった。少し話し合いの時間をとったが、頭をひねるばかりで、考えあぐねているように思われた。このままでは、とても自作詩との比較は時間内では無理だろうと考え、のちにレポートさせることにして、了解をとった。この詩の場合も、わたし自身の解説は最少限度におさえた。

残り時間を使得って、つぎの詩を朗読して、この時間をしめくくった。

高野喜久雄 「耳を」「母親と娘」

富岡多恵子 「身上話」

石川 逸子 「彼ら笑う」「黒い橋」

△第四時▽△第五時▽

わたしの空き時間を使って、つぎのレポートをまとめ、提出させる。

高野喜久雄「鏡」について

——私の詩との比較をとおして——

3

△第三時▽は、この日から始まった教育実習のため、期せずして参観授業となった。先生の何人かがこの日の授業について、つぎのような感想を書いている。わたし自身気づかなかったことも、二、三指摘してあるので、その「教育実習録」から紹介しておく。

題目 現代詩その3

指導者 足立教官

指導の準備

○ 各自△鏡▽という題目で九行の詩を書いてくる。(M)

○ 高野喜久雄の「鏡」は観念性の強い詩なので、難しいのかもしれない。(T)

○ 現代詩の詩集。前時間の生徒の課題作品を集めておく。(O)  
指導の態度

○ あくまで生徒を中心とした授業であり、生徒の書いてきた詩を中心にして、その中から問題をひきだしている。そして、その問題をさらに高度にするため、高野喜久雄の同名の詩をもちだして比較するなど、問題はあらかじめ教師の側で設定されたものではなく、生徒の側に基づいたものである。

(M)

○ リラックスしていてとけこみやすい。

(T)

○ 生徒の作品のいくつかを紹介。常に生徒から出るイメージを中心に述べさせ、むずかしくてわからないものは、そのまま疑問として残す。

(O)

指導の能力

○ 問題をさらに深化されるために、高野喜久雄の詩を出してきたが、少し難解で、なかなか言葉にならなかったようだ。生徒の詩の中からすばやく問題とされる点をとり出して、そこに焦点をあてて授業をすすめていったのはうまいやり方だと思う。(M)

○ 詩を朗読するのはもう少しゆっくり。充分にききとれない所もあった。

(T)

○ 生徒の興味をよくつかんでいる。生徒の発言を大切にすることでよくわかった。

(O)

生徒の観察

○ 自分たちの書いてきた詩を中心に授業をすすめたためか、興味ぶかい態度であった。後半、高野喜久雄の詩については理解しにくく、ことばになりにくそうであったが、何とか理解しようと懸命にとりくんでいるようだった。

(M)

○ 楽しく詩にとけこんでいて、現代詩の難解さも、イメージを軸としているためか、苦になっていないようだ。それが、この作

品の場合、上述の観念性のため妨げられているところもあったが……。

(T)

○ ほとんどの生徒が興味をもって参加していたようだ。自分の、または身近な友だちの作品が読まれるので、興味も強いようだ。

(O)

——昭和48年度『教育実習録』より——

(注) Mは真鍋もと子さん、Tは田中安幸君、Oは尾崎ルイ子さん。ともに広島大学教育学部高校国語科四年。傍点は足立。)

4

右の『実習録』を読んで、改めて考えさせられたこともある。まずT君の指摘(傍点部分)にあるように、「鏡」の詩の観念性が強すぎたのではないかという点である。この時間中、生徒の脳裏をめぐっていた観念は、「ことばになりにくそうであった」とMさんも指摘してくれている。予想以上に「難解」なものとして受けとめられたらしい。実際、自作詩との比較どころではなく、高野喜久雄の「鏡」をどうとらえるかという段階で、かれらは苦慮している。「何とか理解しようと懸命にとりくんでいるようだった。」(Mさん)という印象は、わたしも強く感じた。そこに希望をつないで、もっとじゅうぶんの時間をとる必要を感じ、レポート提出に思い到ったのであった。

ところで、この詩の「難解」さはどこからくるのであろうか。詩の観念性と難解性はむろん同義ではなく、観念的だから難解であるとはかならずしもいえないだろう。この詩が難解に受けとめられた

のには、二つの原因があると思う。これまでにあまりこのような観念性の強い詩にふれたことがなく、それだけでたじろいたことが一つ。それともう一点重要なことは、単に詩だけの問題ではなく、詩という対象と学習主体の関係の問題にある。つまり、生徒たちが△鏡Vをどうとらえているのかという△鏡Vに対する認識の深浅によって、その受容内容に大きな差が生じていたであろうと推察できる。生徒たちがとらえた△鏡Vの世界（自作詩）と、高野喜久雄の「鏡」の世界との間に、△鏡Vに対する認識の落差を直観的に感じたのであろう。それが「難解」ということばになったのだと考えられる。

わたしたちはとかく詩作品のみで判断してしまいがちであるが、実際には、詩対象と学習主体の関係、換言すると学習主体の対象認識の深浅が、詩の受容程度を規定するという一面もみのがせないだろう。

それと、たしかにこの時間は、前の二時間に比べると楽しいふんい気ではなかった。しかし、偏見になるかもしれないが、内容的には前時までより充実していたように思う。授業の活性化と詩の受容されていく深さには、直接の関係はないだろう。現代詩の場合、詩の受容されていくプロセスは複雑で長い。そのプロセスでは、ことば（発言）にならないでわだかまっているものが多くあるだろう。そのあたりがどのような形で表現されてくるだろうかという興味を、レポートの中に期待したいと思っていた。

その他の気づきとして、詩への関心をあえていど維持できたのは、扱った詩の観念的性格と無縁ではないだろうこと。授業中一貫して、わたし自身の解釈らしいものを極力ひかえていたことが、か

えってプラスに作用したであろうことなどが挙げられる。  
以上のように、いろいろな問題点を残しながら、現代詩の三時間の授業をおえた。

#### 四現代詩はどう受容されたか

1

のちに提出されたレポートの中から五篇を、生徒自作の「鏡」（九行）とともにつぎに掲げる。（すべて原文のまま）

#### ① 鏡

私が 笑うと

笑う

私が 泣くと

泣く

鏡の中には

もう一人の私が

そして

別の世界が

あるかもしれない

感じ方というものには深さがあると思います。同じ一つの物を見てもその表面をさっとなでたように浅い感じ方をする人や、その物の奥を深く感じとる人やさまざまです。詩というものは、その感じ

というのを文章に表わしたものでないでしょうか。高野喜久雄さんと私の詩を見ても思ったことは、深さのちがいでということですね。私の詩は、ただ単に「鏡の中には別の世界があるのでないかな。」ということを書いただけです。(本当に自分でも悲しくなるような単純な詩だと思えます。)この人は、私とは全然別のもっと深いことを感じ書いています。この詩を一行一行読んでいき、なるほどと思いました。「その前に立つものは／悉く己の前に立ち／その前で問うものは／そのまま問われるものとなる」考えてみればその通りです。だけど鏡というものは、そんなにも悲しいものだろうか。私は鏡を神秘的なものだと思うし、その中にファンタジーな世界を見る。こんなところも高野喜久雄さんたちがうと思えます。この人の詩に「母親と娘」というのがあったけど、この「鏡」という詩とふんいきが少し似ていたような、そんな感じがします。今まで詩などというものには全然興味のなかった私ですが、この詩を読んでもおもしろいと思いました。少し現代詩の詩集などを読んでみようと思っています。

(田上恭子)

② 鏡

おっさんがやって来た  
おれはおっさんになった

おばんがやって来た  
おれはおばんになった

紳士がやって来た

おれは紳士になるまいと思った

でもおれはなってしまった

どうしてもなってしまった

おれにはおれがない

私の詩と高野喜久雄の詩は同じように鏡を中心に書いたものだが、イメージ、そして鏡についての見方が大きくちがうと思う。同じ鏡の悲しさにしても、かれの詩の中の鏡は一人だけが他の者から大きくはなされていて、私の詩の中の鏡は、それぞれの者の持っている欠点やなやみである。これは、私と高野喜久雄の性格のちがいを表わしていると思う。でも、イメージの方向は同じように思う。それにしてもかれの詩は非常に冷たい感じがする。よくあのように暗い面ばかり出せるものだと思う。

(沖原 謙)

③ 鏡

あなたは 私の一番の友だち

私がおれしい時は あなたもうれしい

私が悲しい時は あなたも悲しい

私が怒っている時は あなたも怒っている

あなたと私は

同じ時に

同じことを考え

同じことをする  
あなたは私の一番の友だち

鏡の中には、自分と同じことを考え、行動する人がいる。私を含め、クラスの人達は、だいたいその人に好感をもっている。しかし、高野氏はこの人を、自分の行動を邪魔する者として憎んでいる。

作者は、「何と悲しいものを、人は創ったことだろう」と書いている。確かに、進み入るためには、相手を進み入れようとするためしりぞかねばならないし、問うものは、相手も問うのでそのまま問われることになる。これを人生におきかえると、自分の前にはいつも敵がいるということだ。だから、作者はこのようなことを書いたのだろうと思う。

しかし、敵がいて悲しい思いをすることによって人間は成長するのではないか？ そのように考えるのなら、むしろ鏡の中の人に対して好意をもつべきではないか？

同じことをするといっても、鏡の中の人は、自分のまねをするのにすぎないのだから、鏡の中の相手に負けることはないのだ。

作者はちょっと気が弱すぎる。又は、人生に悲観的すぎるのではないか？ しかし、私は作者に比べると人生経験でははるかに劣るので、このように楽天的に思ったのかもしれないし、本当は作者のよう  
に考えるのが普通なのかもしれない。  
(築藤玲子)

④ 鏡

一人の少女が言いました

おや おかしな鏡だこと

ゆがんで写る

醜く ゆがんで

人が 景色が すべてが

でもたれも気づかない

ゆがんで写るその姿に

写し出された

真実に

私にとって鏡のイメージは、おとぎ話の中で作られた。「白雪姫」の魔法の鏡をはじめとして、魔女からもらった、心の汚い人を写すなどんな美しい人でも醜く写る不思議な鏡の話。本当に心の美しい人だけを写しだす鏡を持って、お嫁さん探しに行く王子様の話など、あげていけばきりが無いが、どれも一樣に鏡を、真実を写し出すもの、本当のことをいう不思議なものとしている。だから私にとっても、鏡とはこういうものでしかなかったのである。

正直言って、私は高野喜久雄の「鏡」を読んだ時、その現実性やきびしい感情に驚いたのである。私だって詩に現実性を入れなかつたわけではない。醜い、ゆがんだものに対して、無関心な現代を私なりに表現したつもりだった。しかし、やはりプロは違う。高野喜久雄は、この九行の中に鏡を利用しながら見事に訴えるべきものを訴えていると感じた。

ではその訴えるべきものとは何か。この所がよくわからない。ただ最初のイメージから、現代社会のことを表わしているのではないかと思つた。現代の人々の集団・社会というものを見つめたとき、どのような批判をしても、何を考えても、結局はその集団の中に自分があるのである。その前に立つて考えれば考えるほど、その集団の中でふり回されている自分が見える。社会に対する批判をいくらしても、それは自分に対する批判となるのである。しかもその本当の姿を知ろうとするならば、進み入るのでなくかえつて反対方向に退いて、まるで、遠くから客観的に、社会にはふれようともせずに見なければならぬ。

作者には、現代社会を考えた時、本当に悲しいと思えたのではないだろうか。

とにかく私はたった九行の中に、自分のイメージ、訴えを、私にはわからないながらも、立派に描き出し、しかもそれに「鏡」という何ともいい題をつけているこの作者に、とても感心したのである。

(山川志都子)

### ⑤ 鏡

彼は毎日鏡を見てくらしだ。

彼はとても幸福だった。

そこには、本当の自分がある。

そこには、完璧な世界がある。

そこには、自分しかない。

彼は本当の自分をとっておきたいと思つた。

彼は完璧な世界を残しておきたいと思つた。

彼は自分だけの世界をとっておきたいと思つた。

そして彼は鏡を割つた。

人間 (Man) —— 「名詞」自分の心に描くおのれの姿に恍惚として眺め入っているために、当然あるべきおのれの姿が目に入らない動物。(A・ピアス『悪魔の辞典』)

(前、中略) 結局僕の結論は、最初の六行は自分が関係している事、またはある現象は、自分自身の映像であるということ言つて、最後の三行で、その事、あるいは現象の真の姿(結局は自分の真の姿)を知ろうとするなら、それから離れなければならないということと言っているのではないかということになった。(鍵本充敏)

### 2

これらのレポートに託したわたしのねらいは、つぎの三点であつた。

(1) 高野喜久雄「鏡」受容の実態はどうか。

(2) 自作詩を対象化して分析できているかどうか。

(3) 両者の詩の比較、その異同が分析できているかどうか。

これらの観点を下地にして、以下、レポートの分析を試みたい。

### 3

「生まれて初めて書く詩」（Uさん）という生徒もいるほどで、これまでこの生徒たちは詩作の経験に乏しかったためか、どの詩も決して巧みとはいえない。そして、その発想にかなりの類型をみることができる。「鏡の中には、自分と同じことを考え、行動する人がいる。私を含め、クラスの人達は、だいたいその人に好感をもっている」（築藤）というような発想の類型である。つまり、 $\wedge$ 鏡 $\vee$ の機能である「反映」を「自己自身の反映」とみていることで多くの詩は一致している。これはおおよそ予想していたとおりであった。ただ、そこにちがいをみるとすれば、「反映のしかた」のちがいであろう。

たとえば、「別の世界があるのかもしれない」（田上）「自分だけの世界」（鍵本）「あなたは私の一番の友だち」（築藤）などは、 $\wedge$ 鏡 $\vee$ への対象認識であり、「おれにはおれがない」（沖原）などは、対象認識でありながら同時に自己認識ともなっている。 $\wedge$ 鏡 $\vee$ という物質対象について書きながら、その反映という機能に触発されて、 $\wedge$ 鏡 $\vee$ の世界と自己との関係認識から、 $\wedge$ 鏡 $\vee$ の世界すなわち自己の内的世界という自己認識にいたる段階が、生徒作品にはみられ、この段階は、そのまま詩内容の深さの段階をも示している。むしろ自己認識の対極には高野喜久雄の「鏡」の世界があることはいうまでもない。その点高野喜久雄の「鏡」をつきつけられたとき、かれらは詩人高野の自己認識の厳しき、鋭き、深さに驚ろいたのである。

つまり、詩作した時点で、生徒たちは自分の築いた $\wedge$ 鏡 $\vee$ の世界に安んじていたであろうところへ、予告どおり、高野喜久雄の「鏡」をつきつけられて、その世界は大きく揺れ動いたのである。授業

（第三時）の中では、その揺れはなかなかことばにならなかった。ところが、レポートにはかなりはっきりと表われている。この経過をみていえることは、自作詩「鏡」の果たした大きな役割である。自作の「鏡」の世界をかれらが持たないで、高野喜久雄の「鏡」にふれたとしても、その観念性にさまたげられて、きわめて皮相的な段階で、文字面だけをなでるような受容しか期待できなかったのではないかと思われる。

4

つぎに、右のことを再確認する意味で、生徒作品に個別に解説をそえておきたい。

#### ①（田上）

かの女は、高野の「鏡」に「深さ」をみいだしている。しかし、「鏡というものは、そんなに悲しいものだろうか。そんなにきびしいものだろうか。」と逆に問いかえすなかで、自分の $\wedge$ 鏡 $\vee$ 認識を「神秘的」「ファンタジーな世界」とみていたことに気づいていく。そこに二つの詩のちがいを置いている。自作詩の世界が、高野の「鏡」の世界を対置することで明らかになっている。この点は、多かれ少なかれ、すべてのレポートにみられる特色であった。

#### ②（沖原）

一見きわめて単調な詩のようであるが、五例の詩の中では、表現手法の点でいちばんおもしろいものがあるように思う。「おっさん」「おばん」と「紳士」の二様の人物を $\wedge$ 鏡 $\vee$ の意志は厳に峻別する。だが、もともと $\wedge$ 鏡 $\vee$ には意志などはなかった。いや、意志がないのは $\wedge$ 鏡 $\vee$ ではなく、 $\wedge$ 鏡 $\vee$ に写された自分であったという内容である。それを「やって来た」「なった」「なってしまった」などのこ

とばかりかえしで、淡々と表現している。

また、高野の詩を「それにしてもかれの詩は非常に冷たい感じがする」というのも、かれの詩にどこか明るさが感じられるのをふまえての印象であろう。この明るい感じは、「おれにはおれがない」といつつも、かれ自身、「紳士」の群に入ることを峻拒できるという自信めいたものからきているように思う。かれは、毎日おそくまでボールを蹴っているサッカー部のエースである。

#### ④ (築藤)

かの女は高野の「鏡」を、「自分の行動を邪魔する者」「敵」といつている。あまりにも強すぎる表現であるが、かの女自身のもっている「人生観」がのぞけるところである。そして、「悲しさ」と「成長」の相関性を、おそらく自己の体験的な意味をふくませて述べ、高野という詩人を「人生に悲観的すぎるのではないか？」と批判的に考えていく。かの女の論述の支柱は、「鏡の中の相手に負けることはない」という発想であり、そのかぎりでは、 $\Delta$ 鏡 $\nabla$ の物理的機能へのこだわりが感じられる。一篇の詩の解釈にすぎないが、詩人高野吾久雄の特質のようなのをとらえている点では鋭どいレポートである。

#### ④ (山川)

$\Delta$ 鏡 $\nabla$ に対するイメージを体験の中にもとめている点では③のレポートと似ている。おとぎ話の中でつちかわれた $\Delta$ 鏡 $\nabla$ 認識だというが、「だれも気づかない／写しだされた真実」などの詩句には、「おとぎ話の鏡は美しいもの」という以上に、 $\Delta$ 鏡 $\nabla$ の「真実」を見ぬけないでいる他者への揶揄ともうけとれる。

「やはりプロはちがう」といつているのは、自作詩に「訴え」の

稀薄な点を認めてのことである。さらに「現代社会」の中の「集団と個」の関係として考察されていく。ここにも、おそらくかの女自身、現実にかかえている問題意識がさねられているとみることができらるだろう。

#### ⑤ (鍵本)

クラス随一の博識家でおっているかれにふざわしく、ピアスの「悪魔の辞典」から人間 $\nabla$ の項を注としてそえているのが注目される。詩の中でも、行を空けての最後の一行「そして彼は鏡を割った」で、イメージの逆転をねらっている。それまでしつようにくりかえされてきたこと―「本当の自分」「完璧な世界」「自分だけの世界」―が、ここで破壊の対象としてつよくさらに印象づけられるという効果をねらっている。

分析の項では、高野の「鏡」の解釈に終始していて、それもかならずしも真を言いつているとはいえないが、文意の裏に、対象をとらえようとして模索しているかれの姿勢がうかがわれ、それをわたしは好意的にうけとめたいと思う。

#### 5

以上五篇のレポートの総評として言えることは、自作の詩に見られる $\Delta$ 鏡 $\nabla$ への自己認識をたえず一方の核にすえていたことが、高野吾久雄の詩「鏡」を受容していくうえで大きな役割を果たしているということである。「鏡」への問題意識をほりおこしたというだけでなく、自作詩「鏡」と高野の詩「鏡」との質的距離を実感としてうけとめたことで意味があったと思うのである。同一の題、同一の行数という制約の中で、せいっぱい詩作した生徒たちであったが、高野の「鏡」との質的距離をなお感じ、それをうけとめようと

する模索がレポートの位置である。この場合、レポートは結果の報告ではなく、過程の模索がよりよく示されていたという特徴をもっている。

生徒たちは個々の問題意識にみあうさまざまな受容の形態をみてみると、一篇の現代詩にしかすぎない「鏡」という詩の可能性には、わたしの予想を超えるものが秘められていたように思う。高野の詩「鏡」は比喩的というと、生徒個々の現実認識を写しだす、字義どおりの、まさに八鏡Vの機能を果たしたと言えそうである。

## 五 現代詩教育の可能性

わたしの扱ったのはほんの数篇の現代詩にすぎない。しかも、「鏡」(高野喜久雄)をのぞいては、いずれも、そつと触れたという程度のかるい扱いであった。その試みの中から、現代詩教育の可能性を展望することなど、とうていできないと思うが、扱っている中で考えたことのいくつかを提示していくことで、この試みのまとめに代えたく思う。

### (1) 現代詩の教材性

現代詩の教材化に際し問題とされてきたのは、その観念的、抽象的性格である。たしかに、これらの性格は、近代詩一般と比較して大きな特徴であろうが、それが克服されるべきアポリアとされてきたのに対し、わたしはまず疑問に思った。そこでこの試みの中では、その性格をむしろ授業の核にすえようと企図した。

はじめに述べたように、「わかりやすい詩」に食傷きみだという生徒たちに提示した現代詩数篇は、「わかりにくい詩」というだけ

でじゅうぶんの興味をひいたようである。「わかりにくい詩」を「わかろう」とするプロセスがこの授業の動機づけとなった。

そして、現代詩教材の観念性、抽象性は、その特質をあるていど生かすことができたと思う。そこで、認識論が人対V概念として「具象」と「抽象」の関係を改めて考えさせられた。詩が抽象的であるということは、生徒たちがその中に自己の具体的な体験から生まれる、さまざまなイメージを構想していくことが可能となるであろう、という一つの仮説をひきだせたように思う。

### (2) 現代詩教材と生徒の位相

この授業の前に、それまでの「詩の授業」への印象を生徒にきいてみた。「詩なんて解釈できるものなんですか。フィードバックの問題でしょう。」とある女生徒が答えたのはズシンときた。このことには、かの女の偏見も交っつていようが、「詩の授業」が知的理解の解釈中心に傾いていたことに対し、暗に不満を述べている。そして、この授業の中でも、わたしは生徒たちに「どう解釈するのか」をもとめたのであるから、その点でわだちをふみなおしたにすぎないのかもしれない。

しかし、同じ生徒がレポート提出の時、「みんなの解釈はおもしろかった。わたしは自信がありませんが……。」と述べてくれたのに少し希望をもった。とすると、詩の解釈そのものに問題があったというより、詩の解釈が教師の指導の重要なファクターとなっていたことに、むしろ多くの問題があったように思う。

それと関連して、生徒の解釈に対する判断の根拠をどこにおくのかという問題もあろう。どの一つの解釈をとっても、当の生徒たち

にはせいっぱいのものである。そのことを考えると、解釈の判断は、正しいか正しくないかという正否性にはなく、その解釈が深いか浅いかという深淺性におかれるべきだと思ふ。しかも、それを生徒たちがみずからの感性、理性にてらして、授業の中で実感として認識できれば理想的であろう。

### (3) 現代詩教材と教師の位相

授業の中で直接に、またレポートをとおして間接的に生徒たちの「解釈」を聞き、読みするなかで、一篇の詩についてすら、わたし一人の感覚ではとうていとらえきれないだけの深さと多様性をもった「解釈」と出会った。この幅をどう処理してよいのか、正直言つて迷つたものである。たとえば、提出されたレポートの評価にしても、この類のレポートは、性格上わたしには評価しきれないものとするしかなかった。安易にとりあつたことをしたくなかつたからである。生徒一人一人と同じように、わたしもまた一人分の感覚しか持ちえていず、一箇のポエジーをしかその詩について感じえないというのは、いわば当然のことである。四〇名の生徒に対し、わたしは、四一人目の「解釈」を提出することができるだけなのではないだろうか。そして、四〇名の「解釈」を保証していくには、むしろわたしたちの「解釈」を極力おさえていくほうがよいのではないだろうか。詩の教育というのは、「詩を教える」ことではなく、「詩を扱う」といった軽い意識で対処するほうが、無理の生じない授業になるのかもしれない、等々を感想として持った。

### (4) 近代詩教育との接点

詩から受けるイメージを思いきりひろげさせ、他の生徒とのつき合わせをする中でそれをしぼっていくという方向で進めたこの試みでは、「作者」の問題に取立てふれなかつた。方法的には「分析批評」の立場に似ている。

近代詩の主流は主情的な詩にあり、作者である詩人像をとらえさせることが大きな比重をもつのに対し、現代詩の多くは、作者像がとらえにくいのがふつうである。むしろ、わたし自身、今の現代詩人について「略歴」以上のことを知らないこともあるが、作品の性格が抒情を押えた主知的なところで成立していると思うからである。

ところが、レポートの中で、かなりの生徒が、詩人高野喜久雄にふれていたのを考えると、はじめから作者に迫らせてみる方法も、今後考えられると思つた。そこに、近代詩教育との接点も生まれてくるように思ふのである。わたしたちにとって、未知の詩人である現代詩作者像を、詩作品からつくりあげてみるのも興味ぶかいと思われる。

また、現代詩はいうまでもなくわたしたちの同時代の詩作品であるし、その同時代の感覚をより鮮明にとらえるためにも、対比の視点で近代詩を扱うことも当然考えられてよいだろう。

### (5) 指導方法上の問題

文学の授業は周到な教材研究と緻密な授業案にもとづいてなされるものだという通念に異論はない。そのとおりだと思ふが、今回の試みではこの鉄則をはじめから破っていた。現代詩がどのように受容されるか、という関心が先行したためでもあったが、実際に、どの

詩を教材化するかという教材選定に腐心したのが、準備のすべてであった。

生徒の受けとめ方によって、授業の内容、方法を柔軟に変えていくつもりであった。そのため、授業中はずい分と緊張させられた。レポート提出も、当初の予定にはないものであった。

この授業の流れはきわめて不確かなもので、反省しなくてはならないだろうが、授業の内容、方法をじゅうぶん準備しつくしてのぞんだ場合、これほどの多様な「解釈」が保証しえたであろうか、と逆に考えてみると、これも一つの授業方法であったと考えられる。

いずれの方法をとるにせよ、詩の授業で何をねらうのか、そのねらいが指導方法を決定することだけは確かであろう。今回の試みはその一つにすぎない。現代詩の授業の方法については、もう少し実践を重ねてから改めて考えていきたい。

#### おわりに

高校「現代国語」で、逡巡されながらもしだいに教材化されつつある「現代詩」を、中学三年にひきさげて試みた今回の実践には、わたしの気づかないでいる問題も伏在していたらと思う。それを補う意味でも、さらにこの試みを深化させていきたい。

つづく試案として、中学二年、一年と学年を下げていく実践と、高校での実践を予定している。

△付記▽本稿は、昭和四八年度広島大学教育学部光葉会研究大会（昭和四八・八・十一）で報告した△「現代詩」の授業・一つの試

み——高野喜久雄「鏡」を中心に——▽を、改題してまとめたものである。（昭和四九・七・二〇稿）

（広島大学教育学部附属中・高等学校教諭）